

## ○香椎町役場 『香椎町誌』 昭和 28 年 (1953) 363-364 p

戦前チューリップ園の名をもって知られていた香椎町片男佐一帯の 3 万坪の花園は、昭和 22 年 (1947) 農地法による農耕地の指定を受け、強制買収されんとしたが、翌 23 年農地委員会において、再度審議の結果、西鉄に於いて公共的な文化遊園を施設する条件の下に、農耕地指定を場外されたものであって、西鉄営業部においても、阪神地方の宝塚あやめヶ池にも劣らない大遊園地建設の新構想を持っている。同計画は九州勧業との共有にかかる約八万坪の土地に、運動場前駅を玄関として、既設の野球場、バレーコートを取り入れた風向と史跡に恵まれた山と丘の自然の配置を巧みに生かした平地と丘陵の地一帯に、四季とりどりの草花の咲く花壇の中に大人も子どもも、一日を過ごす快適のリクレーション地として、花壇の草花も土産を兼ねて切り売りされることになっている。花のパラダイスの中には、また教材園も設けられ、児童、生徒、一般の教材となる樹木、草花などを多数栽培、遊戯器具も、飛行塔、汽車サークリング、水上自動車、スワン・ボート、子ども電気自動車、子どもオートバイ、児童木馬等が設けられ、小動物園も計画され、中でも、モンキーホールは子どもを喜ばせ、夢の国に誘う構想である。

## ○香住丘校区沿革史づくり実行委員会編『香住ヶ丘校区沿革史』平成 13 年 (2001 年) 102-103P

1942 年 (昭和 17 年) 電鉄 5 社 (九州軌道・九州鉄道・福博電車・筑前参宮鉄道・博多湾鉄道汽船) の合併により、西日本鉄道(株)が設立されると、花園は戦時下の食糧増産のため、田んぼや、芋

畠になり、山手は牧場として、牛舎を建て、牛を育てるなど、(株)糸島農園（西鉄資本 100%）の管理になりました。そのために、戦後は農地とみなされ、農地法に基づき不在地主として、接収されそうになりましたが、町議会等の努力により、西鉄社長・野中春三氏のチューリップ園の再開、及び遊園地化の覚え書きを、香椎町当局と交換して、農地法除外地となり、用地は確保され、香椎花園の基礎ができました。

○鷲崎俊太郎 『西鉄沿線の近現代史』 クロスカルチャー出版 （2024） 187-188 p

「1939年に正式な開園を迎えた香椎チューリップ園は、翌年「福日チューリップ園」と改称します。福日とは福岡日日新聞のことで、西日本新聞の前身の1社にあたります。1941年の4~9月には、宮地岳線の新香椎-和白間に、香椎福日園前という仮停留所が設置され、翌年には運動場前停留場（現・香椎花園前駅）として恒常的に設置されました。しかし、太平洋戦争の長期化により、福日チューリップ園は1943年に閉園して「香椎園」と改称します。そして、食糧増産のため、大豆・菜園を育てる農地に切り替えられました。香椎園は戦後、農地改革による政府買い上げの予定地に指定されていましたが、ここに西鉄が公共的な文化遊園を施設するという条件で、1947年に農地法の適用を除外されます。翌年、西鉄はここに国民体育大会のバレーボールコートを新設し、1950年から遊園地への改造工事に着手しました。西鉄香椎花園として開園したのは、1956年です。香椎花園は2021年で65年間の営業を終え、閉園しました。」

（文責：香住丘校区自治協議会／吉村）